

(16) ストック

ア 各病害虫の防除

萎凋病

菌核病

黒腐病

炭疽病

モザイク病(CMV、TuMV)

アブラムシ類

コナガ

ハイマダラノメイガ

ア 各病害虫の防除

【留意事項】

(□は総合防除計画に掲載している病害虫)

萎凋病

(耕種的・物理的防除)

- 1 発生地には連作しない。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 連作するときには薬剤により床土、育苗用土、育苗箱を消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

菌核病

(耕種的・物理的防除)

- 1 2～3年輪作する。
- 2 発病株を直ちに抜き取る。
- 3 蕾の出る頃からかん水を調節し、過湿を避ける。
- 4 株元の通風を良くする。

※あぶらな科作物や種々の花き類に発生する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 蕾の出る頃まで、薬剤を数日おきに施用(散布)する。

※トップジンM水和剤は汚れに注意する。

黒腐病

- ・ 土壌消毒する([共通防除の章の資材・苗床・本ぼの消毒の項](#)を参照)。

(耕種的・物理的防除)

- 1 なるべく連作しない。
- 2 発病株を直ちに抜き取る。

炭疽病

(耕種的・物理的防除)

- 1 雨よけをする。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発病初期から、薬剤を施用(散布)する。

モザイク病(CMV、TuMV)

(判断、防除に関する措置)

- 1 あぶらな科の他、きく科、なす科、アカザ科、まめ科などの植物に広く感染する。

(耕種的・物理的防除)

- 1 発病株を直ちに抜き取る。

(薬剤防除)

- 1 [本項のアブラムシ類の防除](#)に基づき防除を行う。

アブラムシ類

(耕種的・物理的防除)

- 1 育苗時からアブラムシ類の発生に注意する。黄色粘着テープを施設の出入口や開口部の近く、若しくは苗の近くにするし、有翅成虫が飛来していないか確認する。
- 2 近紫外線除去フィルムは成虫の飛来を減らす効果があるので、これらのフィルムを施設の外張りやトンネルに使用する。

- 3 施設では、側窓や天窓などの開口部に寒冷紗や防虫ネット等を張り、成虫の飛来を防ぐ。
- 4 マルチをする場合は、シルバーポリマルチなど忌避効果のあるものを使用する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 気門封鎖剤を散布する。
- 2 くん煙剤の使用については、[共通防除の章の温室・ビニールハウスでのくん煙剤・常温煙霧剤の使用方の項](#)を参照する。
- 3 発生が予想される場合には、薬剤を施用（散布）する。

コナガ

(予防に関する措置)

- 1 防虫ネット等の使用により、成虫の飛来及び産卵を防ぐ。本虫に対しては、1mm×1mmの目合いで効果が高い。
- 2 ほ場内及びその周辺の雑草の防除に努める。
- 3 施設栽培では、成虫の侵入防止対策として、換気窓等の施設開口部への防虫ネットによる被覆を行う。
- 4 交信かく乱剤を活用した防除を行う。
- 5 施設栽培においては、栽培終了後に蒸込み処理を行う。

(判断、防除に関する措置)

- 1 卵や若齢幼虫が寄生している葉を見つけ次第、除去する。
- 2 BT剤を活用した防除を行う。
- 3 発生予察情報を参考に、ほ場の見回り等による早期発見に努め、発生初期に薬剤散布等を実施する。
- 4 結球野菜では、結球前の防除を徹底する。
- 5 農薬を使用する場合には、同一系統の薬剤の連続使用を避け、異なる系統の薬剤によるローテーション散布を行う。さらに、地域内で薬剤抵抗性等が確認されている薬剤の使用判断については指導機関の指示に従う。
- 6 作物残さを適切に処分する。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 交信かく乱剤を活用する。
 - 2 BT剤を散布する。
 - 3 発生が予想される場合には、薬剤を散布する。薬剤を施用（散布）する。コナガは薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統の薬剤の連用は避け、数群でのローテーション散布を行う。なお、既に抵抗性の発達している薬剤も認められるが、その程度は地域により差があるため、実際の使用状況から推測して薬剤を選択する。
- ※ストックは、薬剤により幼苗期と花蕾出現期に薬害が出やすいので注意する。

ハイマダラノメイガ

(判断、防除に関する措置)

- 1 8～9月に発生が多い。

(耕種的・物理的防除)

- 1 ハウス開口部を寒冷紗で覆い、雌成虫を侵入させない。この場合、ハウス内が高温にならないようにハウス内の換気を十分行う。

(薬剤防除) [農薬登録情報](#)

- 1 発生が予想される場合、薬剤を施用（散布）する。